ヤパパの月

白秋民謡

7

ARS

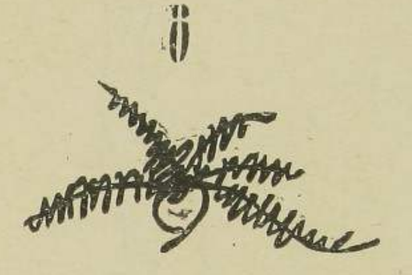
白秋民謠の言葉

燕の二つ三つと、
鰯のひとつかみと、
たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、
わたしのこの民謠と。
そして、歌つてもらひたいのだ。

月の芭蕉樹

小笠原新調　其一

北原白秋　著



白秋民謠

7

小序

土は朱紅、海は瑠璃、日光は金、月光は銀綠、山上に椰子、海底に珊瑚、パパヤは蕃樹にして、梢に黃なるカボチヤの如き花を飜し、その蔭に檳榔葉葺の異人小屋がある。南海の一列島、その小笠原の哀調は八丈より傳りて更に新鮮、いささか西班牙、南洋の風を交へてゐる。

男伊達ならワントネの岬(はな)の
潮のながれをとめて見な

白秋

月のパパヤ

目次

小笠原島夜話……三
パパヤの花
小笠原群島(七章)……三
南の海(三章)……八
びいでびいで(二章)……一〇
佛草花(四章)……一三
島はよいとこ(四章)……一五
驟雨……一八
夏の宵月(七章)……一九
星の夜(四章)……二四
夕凪(二章)……二七
南海の戀(五章)……二九
島のあひびき(二章)……三三
闘守(二章)……三五
追分……三七
山で(二章)……三八
島の山中(二章)……四〇
山の枯草(三章)……四二

小笠原島夜話

小笠原新調 其一

小笠原島夜話

一

島の自然觀、乃至はその住民の狀態に就いて、何か話せとお仰るのですか。それなら差當り小笠原島のお話でもさしていただきませうか。『聞いて極樂、見て地獄』と申しますが、決してああいふ離れ島などに內地の人が、永く住めるものではありません。

小笠原島も元は隨分の極樂島だつたと、生き殘りの黑人の爺などが、ある晩深い溜息を吐いて私に話して吳れましたが、それは或はさうだつたかも知れません。その頃あの島々もまた童のやうな生れた儘の島で、そこには紅い崖や綠青色の岩壁や、高い椰子や、林投樹や、モモタマの木の鍬などが、澄み徹つた瑠璃色の空と海水とに、强烈な亞熱帶の色彩を耀やかしてゐる外には、あの、圖抜けて阿呆らしい信天翁や四時婉轉として鶯や瑠璃鳥が啼き恍れてゐるばかりで、毒蟲一つゐず、太陽は大きく耀やかしく、月も大きく朗らかであり、星も大きく光芒を曳いて、晝も夜もただ燦爛とした自然相を織り續けてゐたのでした。

たまたま、天明五年に土州の船頭四人、同じく八年に肥前船の十一人、寛政元年に日向志布志浦の船頭榮右衞門とその船子の四人都合十七人が

同じ一つの無人島に漂流して、永いのは十二年、短かくて七八年、具さに漂人としての辛苦艱難を共にする內に、その中の幾人かは病死し、やつと殘りの人數だけで、覺束ない小舟を造つて、どうにか八丈島まで漕ぎついたといふ事もありました。その島は今でいふ鳥島かと思はれますが、ああいふ限りの無い麗光の中に在つても、人間は決して人間社會を離れて生きてゆけないと云ふ大事が痛切に感じられたに違ひありません。

母島の傳說に據りますと、曾てその島に漂流した內地人の中で、生き殘つたはただ船頭とその妻と、若い船子との三人でした。無人島に男が二人と女が一人です。一人の女は自然と二人の妻になつて了ひました。其處は無人島です。人間社會の外です。考へて下さい。その三人にはその時、ただ一つの共同の火を守る事が何より神聖な、また痛切な緊要事

でした。船頭とその妻とが洞窟に夜眠る時、若い船子は、一晩中その外に在つて、その火を守らなければなりませんでした。そしてまた、若い船子と自分の妻とが夜眠る時、船頭は、しよぼしよぼと目をしばたたきながら、また一晩中、洞窟の外に蹲んで火を守らなければなりませんでした。船頭は老いてゐる。船子は若い。人間は終に人間です。船頭はある深夜突然激怒と嫉妬とに驅られて思はず、自分の守つてゐた薪火を岩壁にたたきつけて了ひました。火が消にて了ひました。その三人の生死の火が。

所謂黒船の提督ペルリが浦賀へ來て、太平の島帝國を脅かして、一旦本國へ歸ると稱して南へ去つた後。再交渉の爲め北上したその間は、彼は彼の艦隊を小笠原島の父島に停めてゐたのだと云ひます。本國へなぞは歸つてゐなかつたらしいのです。彼はその島を開墾し、石炭貯藏庫を

建て、部落を作り、後には整然たる三頭政治を布いたと申傳へます。さういふ風にささやかでも人間同志の社會組織が成立すると、ただ絶海の無人島として、人をして恐れしめ凄まじがらせたその島々にも初めて温かな人間の愛情と心音とが燃に立つて來ました。人間もまた、その燦爛とした自然の麗光を、初めて安心して目にし耳にし、觸れ、嗅ぎ、親しみ出した事も、非常に考ぶべき事だらうと思ひます。無論、人間がゐなかつた時も、一人二人漂流して來た時も、部落ができ一小社會を形つた後も、その自然の本體には少しの異動があつた筈はありません。そこへゆくと寂しいのは人間です。大勢集まつて、愛と道義と禮節と相互扶助とで寄り合はねば生きてゆけないのです。何ものの麗光をも感知する丈の餘裕も持ちあはせないのです。

ペルリの艦隊が去つた後も、殘るものは殘つたし、それに船から逃げ上つた黑人の奴隷、密獵船員の家族などが相變らず共同的な安樂な生活を續けてゐました。大統領もゐました。無論共和政治です。然しただ部落は小さな一つの部落に過ぎませんでした、それだけ山野の食物は豐富になり、大して開墾せずともバナナもあれば椰子の實もあり、自然の恩惠は少數の人々にとつては飽き足るほど充實してゐました。それに外界との小面倒な交渉は無し、不純な權勢からも壓迫されず、たゞ自然と整つて來る秩序と不文律の道義的制裁とが、その社會をおのづから美しいものに育ててゆきました。それで人々もしぜんと珍草寄木を愛翫したり、畑を作つたり、互に遊樂したり、自由に戀慕し合つたりしたらしいのでした。空腹じくなる頃には、工合よくまたペルリの放して置いたのちに、

しぜんと繁殖した豚の群集が山を下りては部落の檳榔葺の小屋近くに啼いて來たさうです。それを甘蔗燒酒を飲み合ひ乍ら、厨房から鐵砲で射つたものだと云ひます。正覺坊にしてからが、その頃は隨分と灣内に游泳してゐたものださうで、二時間も丸木舟で漕ぎ廻れば、三頭や四頭は無雜作に手捕りにする事ができたし、全くその頃の小笠原島は一種の極樂島だつたに違ひありません。

二

それが明治になつて日本の版圖になると、すつかり根抵から破壞されて了ひました。警察權と行政權とを一緒に兼ねた王樣のやうな島司と云ふ者が來る。サアベルがガチヤガチヤ鳴る、小面憎い矯慢な小役人がのさばる。こすつからい喰ひつめ者の小商人が入り込む、繁雜な文明の餘

弊と、官僚的階級思想が瀰漫する、島の民主的極樂境は一方から云へば殆ど滅茶々々になつて了ひました。それで今まで自由に開墾し得た土地も制限され、あまつさへ花畑も野菜畑も取り上げられ、押し縮められて、以前の島民は遂にほ島の一方に追ひつめられて、辛うじて生命をつなぐ丈の生活しかできなくなつて了ひました。以前はただ物々交換だつたのが一にも二にも金で無くてはならなくなる。遠海漁獵が嚴禁される、さうなると、優越人種としての彼等の倨傲心を滿足さすべき何らの生活をも保持する丈の自由さが全然失はれて了つたのです。彼等は歸化せねばならなくなりましたが、彼等歸化人位みぢめなものはありますまい。

内地人が入り込み、人口が殖ゐるとまた島全般に亘つてもいよいよやこしくなりました。遊女屋も出來るし、警察も出來るし、裁判所も建て

ば監獄も建つ、從つて罪人も生ずる。

それでもまだ初めの頃は呑氣千萬なものだつたさうでした。たとへば骨牌など引いて監獄にぶち込まれた者共が、夜になると抜け出して、濱へ出て卵を生みに上つた正覺坊を引つとらへ、それを賣り飛ばして、その金で遊女買をして、夜明には澄まして獄窓の中に歸つてゐる。まるでお話のやうですが實際だつたさうです。流石に太平洋の眞中だからそこは内地と違ひます。

私がその島に渡つたのは、それから四十年も後の事です。その島へ上ると、私は第一に亞熱帶の强烈な光と熱と、熾烈な色彩と、曾て見た事も無い南洋植物の怪異な形態とその豐滿な薫香とで先づ卒倒しさうになりました。次いでは、南洋式の丸木舟に驚き、砂濱で髮毛の虱をむしりつ

ぶしてゐる肥滿した黑人の婆に驚き、紅い豆畑に大きな眼鏡をかけ灰色のジヤケツに紅いスカートを穿いた白哲人の金髮に驚き、以前は人を喰つたといふ老黑奴の神妙に奉仕してゐる魔法使のやうな西班牙貴族の癩病婆に驚き、丸木舟を大きなお尻で二つに割つたといふ山羊飼の黑坊娘に驚き、ヂョーヂ・ワシントンと云ふ久留米絣の單衣を着た黑ん坊の青年に驚きました。次いでは、また陽物の形した白檀の根つ株ばかり拾ひ集めたり、珊瑚や信天翁の羽根と一緒に、北齋や廣重の版畫の中に雜魚寢したりしてゐる傳說中の太平の老逸民を見て驚き、次ではまた廢れ果てた監獄の庭に咲き盛つてゐるビーデビーデの花や赤い碇草や佛草花の繪模樣に驚き、二三寸も埃がたまつて子供たちの舞臺になつてゐる裁判所の法廷を見ては驚き、それからすばらしく瀟洒な白尖塔の教會を見て

驚き、それからまた完美した植物園と、堂々とした大理石の島司の頌德碑に驚き、役所で鶯の啼き合せをやつたり、午後からは濱へ出て鰯ばかり釣つてゐる呑氣至極な役人達に驚き、煙草だけは現金で願ひます、他は現金でお買ひ下さる方には二割引致しますと書いた商家の張札に驚き、質屋と乞食が見當らず、若い女と醉つぱらひの見にゐのに驚き、島全體が共產的なのにも驚きました。

それにまた、蝮その他の害蟲もゐず、蛙もゐなければ蛞蝓もゐず、たゞ油蟲と蟻の猛勢なのには驚きましたが、雀も鴉もゐず、鶯ばかりが內地の雀ほどに啼き競つてゐる麗明さにも驚きました。それに獸としては山奧にペルリの放した鹿の子孫とかが二匹ゐるばかり、あとは牛と山羊鼠の少々だと云ふのにも驚きました。

かう云へばまるで極樂世界のやうですが、住み馴れて見ると、流石に島は島でした。せせこましい小地獄。

第一にみじめなのは歸化人の部落で、何もかもが幻滅の悲哀の中に陷ちこんで、生氣も無ければ金も無く、食うや食はずで南洋のグアム島あたりに移住するのが相次ぐ有樣でした。殘つたものは殆ど日本化して了つて、日本人の娘と結婚する事を何よりの光榮として、その鼻息ばかりを窺つてゐました。監獄と裁判所とが荒廢したのは東京のそれらと合併したので、罪人が一人出れば巡査が遙々一人は附いて上京するので、高が煙草の葉一枚發見されても東京地方裁判所に廻される。つまりは莫大な巡査の旅費だけが殖ゐて來るといふやかましい事になつて了つてゐたのでした。それに島司の頌德碑は島司自身が島民を強ひて自身を祭らせ

たので、いつぞやは巡檢の侍從の前で赤恥掻いたといふ話もあります。

島に若い娘がゐないのは、たゞ一時の虚榮に走つて都會の空に憧れて奉公に出拂つて了つたので、醉つぱらひがゐないのは金が無いので酒も飲まれず、たまたま夫婦喧嘩でもした小役人が、その晩すぐと遊女屋に飛びこめばとくの昔にその喧嘩の次第が相手の女に知れて居り、質屋が無いのは質に入れれば、たちまち島中に知れわたる。乞食になりかけると、直樣内地に追つ拂はれる。共産的で面白いと思へば、すべての利潤の多い生産業は殆ど島廳の事業で、うまい汁は島司が吸つて、あとはたゞ辛い奉公といふだけだし、何さま島中の總現金が二千圓といふ哀れさで、そのせち辛さは想像にもつかないだらうと思ひます。

商店の現金二割引もつまりは現金が無いからです、殆ど物々交換の習

慣が殘つてゐるので、何もかもカケで、現金は船の入る時拂ひ。だから買人が有つても品物が有つても、商人はただ有りませんの一點張、これでは繁昌する目當はありません。ですから諸商賣が凡て痩靡して振ひつこは無いのです。

漁師にしても、どうせ人口には限りがあるので、澤山漁れば値が廉くなる、それで慌てて少く漁つてすぐ引き歸す。早いが勝ちですから、漁業の盛んになるわけもありません。

百姓の小悧巧と狡るさとも頂上です。冬の最中に茄子や南瓜が生つてもわざと小さいのを東京に高價で送つて了ふ。だから島で買はうと思へば凡て東京相場で、目の飛び出るほど高いので、自分で畑でも持たない限りは、バナナ一つでも容易には口に入りません。

正覺坊にしてからすぐに殺して罐詰にして送り出す。島の者は漁師で無い限りお裾わけはしてもらへません。牛を一ヶ月に一匹殺しても殺した日に賣り切つて了ふので、遲く市場へ行つたものは買ひ損ふ。一ヶ月に一度の牛肉がこれだから、市場はまるで餓鬼道の騷ぎです。

鷄卵を食べようと思へば鷄からして東京から取り寄せればならず。豆腐を食べようと思へば、一週間前に約束して置く。ランプのホヤが壞れれば、別のランプを買はれば、夜も眞つ暗でゐなくてはなりません。

商人の狡猾と奸譎とは、殆ど日本中捜しても、あれほどのところはありますまい。物價は東京の三倍以上だし、物資は缺乏してゐる。たまに豫定に三日も遲れて內地からの船が來れば、その以前に早や、島には米も無ければ、味噌醬油も無く菓子も無ければ酒も無い。島民は半死半生

です。

三

だから月に一度、内地からの定期船が入つて來る日の騷ぎと云つたらありません。その船は新聞、雜誌、書簡、小荷物、流行唄、あらゆる文明の新消息をもたらして、この無聊で倦怠しきつた島をまるで戰場のやうに緊張させ、亢奮させて了ふ——。島民は物質的にも精神的にも餓ゑ切つてゐるのです。船がいよいよ着くといふ日の朝などは海拔一千尺の船見山の絶巓に登つて、水天のかなたに一抹の煙の上つてから殆ど四五時間といふのは坐つたきりで凝視してゐます。近づいた船がその岬の一角を曲つて、いよいよその灣口に入りかけて、ぽうと汽笛を鳴らす時の深嚴さもありません。それをきくと、島中がまた、たゞわあと聲をあげる。

船中の者が、白皙人も黑奴も顏の黃色い日本人も凡てが波止場に群つて、巨大な萬年青や龍舌蘭の蔭から押しあひへしあひ、新來の客を覗見したり、批評し合つたりしてゐます。たゞ譯もない憧憬と好奇の心を持つて、その時はまるで島中が小娘のやうにワクワクしてゐます。

船が出て行つて了ふと、島はまたぐつたりと疲れて、火の消えたやうです。さうして狹い離れ島の天地が、それからはまた一層、狹く小さく縮こまつて了ひます。

新來の內地人に向つては、その初め好奇と憧憬とを寄せてゐた心が、間も無く理由のない敵意となり反感となり嫉妬となり憎惡となり迫害的に推移して來るのも、一種の島人根性です。殊に島の官憲は、それらの人々に向つて、全然島の平和を害する擾亂者とし、侵入者とし、罪人視

し、極端に之を拒避しようとかかる傾向があります。

私の連の女性の一人が紫色の羽織を着てゐるといふので、島の若い者の性慾を刺戟する怪しからぬとその筋へ訴へ出た者もありました。

殊に島民の『肺病』を恐るゝ事は極端です。而してその恐るべき病毒の傳播者は凡てが内地からのそれら旅人にあるとさへ思ひ詰めてゐます。尤も肺病患者の多くが、南方の極樂島とし、理想鄕として、充分の保養を目的に、その地の小學教員、郵便局員などに轉任させて貰つて來るのも多いのです。然し駄目です。その肺病患者が八丈島あたりに寄港する頃は、もう電報が小笠原島まで飛んでゐます。

ハイビヤウナンニンユクチウイセヨ

だから堪りません。その人が島へ上る頃にはもう島中に知れ渡つてゐ

て、宿屋でも斷れば飲食店でも斷る、理髮店へ行つても『肺病お斷り』と書いてある。仕方なく泣きの涙で磯濱や、洞穴の中でバナナの葉でも敷いて夜を明し、木の果をあさり、遂には三日とゐたたまれずに歸りの船で追つ拂はれて了ふ。さういふ時、島中が眼です。中には宿屋から斷られ、困つて、土地を買ひ家を買つて、いざその家へ這入らうとすると、周圍から立退請求です。自分の家へ自分の身さへ置くに置かれず、草に臥し、荒磯に寢れ、やつと次の便船で歸るには歸れたが、その途中で血を吐いて死んで行く人もありました。さうなると島民の慘酷性は頂上です。

私は肺病だつた私の第一の妻と、その友人の同じく肺病だつた女性とその妹とを連れて殆ど命懸けに身を投げ出して、保養の地を求めに行き

ました。ところがさういふ風です。私たちは心の底から顫へ上つてただ面と面とを見合せました。秘密！　秘密！　どうにでも極秘にしなければ四人とも生き死の慘虐な目にあはれば濟みません。その間の私の心勞といふものは無かつたのです。私の妻ももう一人のも幾度か血を吐きました。そのうちに健康だつたもう一人のも肋膜炎になつて了ひました。丈夫なのはたつた私一人です。醫者にも診せられません。診て貰つたら、すぐに肺患者だと云ふ事は島中に知れて了ふのです。空氣は乾燥する、島中は白眼を以て意地わるく追求する。病人はわるくなる、それを極秘にしなければ命にかかはる。――この間に私たちはまた一文なしになつて了ひました。私の小笠原渡海をたゞ詩人の好奇的遊樂と思つて、色々に笑つてゐた人々も内地にはありましたが、今だからすつかり、お話しま

す。そんな呑氣な事では無かつたのです。

そのうちに同じく肺患を秘密にしてゐた小學教員が、その病の重くなると一緒に霹見して、追つ拂はれる。同じやうな郵便局員が死にかかる。それを内地から看護に遙々と來た母親が死ぬ。――目も當てられぬ悲劇が次ぎ次ぎに私達の周圍には起ります。今日は人の身、明日は自分の身の上といふ、その恐ろしい絶望が刻々に私達を青くして來る。たまらなくなつて、やつと金の工面をして二人だけは内地へ歸し、一旦は妻と居殘りましたが、その妻をもまた二ヶ月の末に歸し、いよいよ最後の一人となつて踏み止まつた時、私はそれこそ一文なし、處は絶海の離れ島です。人情は冷酷、金は無し、これからの苦しさは全くお話はできませぬ。そのうち一と月經つて私は又やつとの事で歸航の船に逃げ上りました。

さうして歸つて來ると、妻はもう貧乏がいやになつたから別れたいと云ひます。何の爲めに私はその二三年命を投げ出して苦しんだか。――その後の私は全く、一時は全世界の女性を呪つて了ひました。

この事は追つて、私は書きます。

私が島を立つ頃に、その粟粒ほどの小天地にも、恐ろしい一騒動が起りました。島司排斥の爆發です。それが爲めに私までがその渦中に卷きこまれて、殆どその煽動者かの如く島司一派から憎まれました。暴虐と壓政と自派擁護と、それらを、鼓を鳴らして駁擊する所謂正義派なるものも、矢つ張り離れ小島の正義派です。佐倉宗吾氣取りの某々の如きも結局は哀れな小名譽心の傀儡です。と思ふと氣の毒でもあり、をかしくもあり、迷惑でもありました。

恐ろしい事には、反對派の一人二人がたゞ何氣なく山路で行き遇はして一言二言、何かささやいた、それさへ、その日には役所へも島中にも知れ渡つてゆく事です。

そればかりでなく、その朝電報爲替が何圓誰それに送つて來たと云ふ事もその晝には島の商家にはチヤーンと知れ渡つてゐます。私もやつと金を送つて貰つて一息つけるともう、片つ端からせびり取られて了ひました。そしてまた元の一文なしで煙草一つ吸へなくなりました。

島は浮世離れてゐるやうで、却て、浮世それ自身を、縮圖してゐます。島の自然の麗色など悠々と觀賞してゐられるものですか。かうなると自然は人間から思ふさま踏みにじられて了つて來ます。

文明と云ふのも中途半端ではよしあしです。

附記　これは往年書いたものであるが、私の小笠原民謡を讀まれる方に一應島の人情風俗を知っていただく爲めに序に代へてここに掲げた。

パパヤの花

小笠原群島

1

お父、父島、
お母、母島よ。
離ればなれの
秋の雲。

2

わたしや、父島、
父親がかり。
いとし母島、
去られ島

3

父の島から

背伸して見れば
うみの母島、
乳房山。

4

父の島より
兄島恐や、
風の出潮は
なほ恐や。

5

弟島かよ、
皆朱の崖に、
椰子がちよぼちよぼ、
棄兒島。

6

婿と嫁島、

また時化ぐもり、
間の媒介島。
疝氣島。

7

妹島かよ、
繼子の姉か、
なまじ朝燒、
すぐ時化る。

南の海

1

浅瀬、水あさぎ、
入江は瑠璃よ、
沖は黑潮、濃むらさき。

2

崖は紅いろ、
バナナは緣、
檳榔しやら〳〵、晝の月。

3

島の墓場は
紅い花ばかり、
いつも鶯、媾曳。

びいでびいで

びいでびいでの木の花は紅い、
花かんざしのやうな南國の花。

1

びいでびいでの
今、花盛り、
紅いかんざし、
曉の霧。

2

びいでびいでの
あの花かげで、
何とお仰つた、
末かけた。

佛草花

1

おまへ、佛草花の
紅い花盛り、
氣儘さしやんせ、
今盛り。

2

紅い佛草花の
まだ、あの背戸に、
なにか忘れた
氣がしてる。

3

紅い佛草花の

咲く窓越えて
來いと誰が云うた
月に云うた。

4

月に見つけた、
佛草花の垣に、
誰か忘れた
獨木舟の櫂。

島はよいとこ

1

柱、　白檀、
檳榔葉のお屋根、
島はよいとこ、
寢て暮らす。

2

朝日夕日に
白檀焚いて
島はよいとこ、
赤茄子飯。

3

風呂を沸かすなら

白檀焚いて、
島はよいとこ、
椰子の月。

4

『様の痕煙草』に和して

たとへ白檀
千兩しよとままよ、
様の化粧湯は
絶やしやせぬ。

驟雨

さアと來たせか、
からりと霽れて、
島は男の宵の月。

夏の宵月

1

月の圓さよ、
今宵の明さ、
護謨の葉越しの
燈の靑さ。

2

島は宵月、
宵からおじやれ、
かはい獨木舟で
早やおじやれ。

3

今は宵月、

夜ふけておじやれ、
濱はタマナの
花ざかり。

4

忍び忍ばれ
夜ふけて來たが、
今ぢや宵月、
晝の虹。

5

花で白いのは
タナマに萬年青。
月に阿呆鳥。
天の川。

6

様か、ひとりか、

埠頭の月に
ぽつり、煙草の
火がついた。

7

月の蕃瓜樹に
笛吹き上手
窓は四角の
青硝子。

星の夜

1

宵の明星の
線ひく海は
月の夜よりか
まだ白い。

2

椰子の葉末の
ぬか星なれば、
まだもチラチラ、
眼も合はぬ。

3

天の川かよ、

一本椰子か。
浪の音かよ、
夜のふかさ。

4

せめて、夜の明け、
満潮待ちやれ。
星のチラチラ
見て漕ぎやれ。

夕凪

1

明日は日和か、
月待ち雲か。
小焼夕焼
帆がつづく。

2

今宵月夜か、
夕陽の岬か、
かはい獨木舟の
緋の片帆。

南海の戀

1

赤い雲丹かよ、
岩間の薔薇か、
とても見事な
ぬしの刺。

2

紫天鵞絨の
海鼠じやなかろ、
なぜに骨なし、
寢てばかり。

3

磯で憎いは、

色變章魚よ。
知らぬ顏すりや、
酢をかけろ。

4

長居、長蝦、
章魚足、海膽、
海鼠コリコリ、
酢を嚙まそ。

5

海で赤いのは
珊瑚の森よ。
磯で海松、
椰子の月。

島のあひびき

1

信天翁の
羽根つむ小舍は
白い月夜の
忍び場所。

2

赤い畑の
バナナの蔭は
晝のやすみの
かくれ場所。

關守

1

パパヤ咲いたかやと、
そつと寄つてゐたら、
山羊が見つけた。
角立てた。

2

明けの山椒の實を
そつと出て嚙めば、
瑠璃鳥が見つけた。
聲立てた。

追分

誰が吹くのか、月夜の島に、
ひとり、ほそぼそ、一節切。

椰子の花咲く南の夏に、
忍路高島、北の雪。

山で

1

山でかをるのは
メリケン女松、
紫檀、黒檀、
たがやさん

2

ヘゴは千年木
花こそ咲かね
獨活の大木
ほろと朽つ。

島の山中

1

亞米利加松吹く日中の風は
幽かなりやこそ、
目がさめた。

2

羊齒の深みに葉づたふ露の
細かなりやこそ、
日も闌けた。

山の枯草

小笠原父島の枯草に非常に香の高いのがある。香水の原料になるといふ。

1

山の枯草
枯れたはよいが、
なまじ、なまなか、香が強い。

2

山の名なし草、
枯れたはよいが、
なまじ、枯れたで、香が高い。

3

枯れりや枯れたで、

枯草の香り、
なまじ、山中、香が深い。

卷末に

わたくしの小笠原島民謠は此の『パパヤの花』五十一章と次卷の『椰子の日永』三十五章と合せて、一先づ獨ふ事になる。此の卷ではただ島の光明方面のみを歌つて、夜話に書いたやうなあの日永の寂しさ苦しさ遺瀨なさといふものが出てゐない。これは次卷に歌つてある。で、續いてから〳〵と鳴る椰子の實の、あの梢の音に耳かたむけてほしく思ふ。

白秋

月のパパヤ

定價參拾錢

版權所有

大正十二年一月一日印刷
大正十二年一月十日發行

著作者　北原白秋

合資會社アルス代表者
發行者　北原鐵雄
東京市京橋區銀座尾張町新地五號

印刷者　山本源太郎
東京市小石川區久堅町五十四番地

製本　金子

發行所　東京市京橋區銀座尾張町　合資會社アルス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八八番

民謡集

日本の笛

北原白秋氏著及装畫 色刷扉畫 拾葉

詩壇の巨匠白秋氏の新民謡參百八拾章成る。これ民衆の言葉を以て、民衆の生活、感情を歌へる眞の民衆の詩也。南風の港に鮪を追ふ素朴なる漁夫の唄、月光の濱に濡れて立つ海女の戀、髪は背の丈、油は椿。磯燕飛ぶ八丈島の鄙唄。月は桃色宵の月、マンドリンの爪彈を偲ぶべき輕快なる都會情緒。博多帶しめ筑前絞、凄艶を極むる博多古調、南國の情熱。雪と落葉樹、北國の驛路に咽び泣くが如き追分の哀愁。悉く歌ふべく誦すべし。今や民謡隆興の秋にあたり白秋氏の新著まさに太陽の如く出でたり。

四六判箱入絹表裝美本 定價貳圓八拾錢 送料拾八錢

白秋民謡

第一輯 空に眞赤な
第二輯 さすらひの唄
第三輯 朝草刈り
第四輯 城ケ島の雨
第五輯 朝立つ虹
第六輯 朱欒の港

◇定價各冊參拾錢◇
◇送料各冊貳錢◇

白秋パンフレット

第一輯　短唱　月光微韻
第二輯　短章　落葉松
第三輯　短章　初冬の星
第四輯　詩集　動き來るもの
第五輯　民謡體短唱　薄陽の旅
第六輯　小唄　雀の頭巾

◇定價各冊參拾錢◇
◇送料各冊貳錢◇